

# 明日香キトラ古墳壁画の玄武図について

網 干 善 教

## (1)

奈良県明日香村阿部山に所在するキトラ古墳の石槨内に星宿、日月、四神図が描かれていることは以前の調査によって判明していた。ところが2001年（平成13）3月22日にデジタルカメラを挿入し撮影したところ新しく南壁に朱雀図が描かれていることが分かったと同時に北壁の玄武図の比較的鮮明な映像が得られた。

実は1983年（昭和58）11月7日、第1回目のファイバースコープの挿入により玄武図の遺存を確認していたが、映像が鮮明でなく詳細な観察はできなかった。今回はそれをある程度補うことができたと同時に玄武図の形態、表現などの手掛かりを把握することができた。それをもとに若干の私見を述べてみたい。

## (2)

鑑鏡や瓦当、壁画などに四神像が表現されて

いる事例は中国をはじめ高句麗、百濟、さらにはわが国の文物にみられる。これは中国における四神思想を基調としていることはいうまでもない。したがって、28宿の北方7宿から具象化された玄武図があると、それは中国に由来するものであるとされるのである。ところが古墳壁画の場合、四神図を描かれたものが中国吉林省集安や北朝鮮平壤周辺の高句麗古墳壁画に著名なものが多いから、短絡的に玄武図があればすぐ高句麗古墳壁画と比較し、その影響、あるいは高松塚古墳やキトラ古墳の場合などでは絵師の問題にふれて、高句麗からの渡来若しくは渡来系の画工によって描かれたとする意見まで述べられたことがあった。果してそうであろうか。それは玄武図すなわち高句麗壁画という先入感があるのではなかろうか。確かに先述の如く四神思想は中国に由来する思想であり、表現であることは間違いないが、表現の方法、描写の技



キトラ古墳壁画の玄武図



江西大墓



高松塚古墳



薬師寺本尊台座



正倉院十二支八卦背円鏡

術など必ずしも同じものではないと考える。

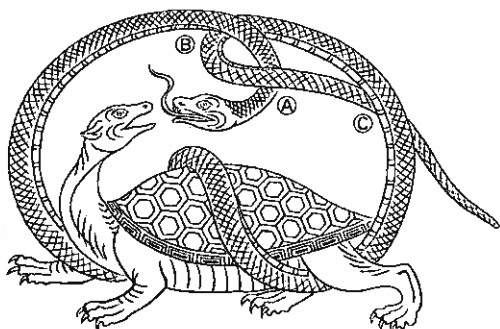
例えば、高句麗古墳では集安にある五盔墳の第4号、第5墳、四神塚などの玄武と、有名な江西大墓の玄武図と、高松塚古墳、キトラ古墳、あるいは奈良薬師寺本尊如来像台座や正倉院御物八卦背十二支円鏡の玄武図などを比較すると相違する表現のあることが分かる。この表現の相違を無視して全く同一のものと考えたり、高句麗古墳にあるから、絵師は高句麗からの渡来人、あるいはその子孫であろうとか、具体的な人物として黄文連本実を挙げることなど、軽々に論ずるべきではないと思う。以下その理由を挙げておく。

### (3)

キトラ古墳で確認した玄武図をもとに製作された玄武の模式図がある。この壁画のなかで、亀に蛇が絡む表現を観察してみよう。

西を向く亀が描かれる。この亀の顔は蛇と対峙している。蛇の顔から尻尾にいたる体の絡み方をみると1箇所絡みと1箇所の交叉するところがある。この頸から尻尾までの説明に便宜上、④、⑤、⑥の記号を符しておく。

蛇が顔から頸にいたるところの最初の交叉する位置④をみると頸の方が尻尾側の下を潜る。次に⑤の交点をみると、頸から上ってきた体は上側を通り交叉する。これで確かに絡まること



模式図

を表現している。

次に蛇体は亀の前脚の間を通り、甲羅を一重に巻いて、後脚を通り、上にはねあがる。尻尾との交叉する③では尻尾の方が下になる。これがキトラ古墳の玄武図であり、高松塚古墳の玄武図と同一の描き方である。

次に高松塚古墳以来、よく比較される資料に高句麗江西大墓の玄武図がある。江西大墓の玄武図では①は頸のところが上になり、②の交点では下になり、③では尻尾の方が上を通る。結論からいえば、江西三墓と高松塚古墳やキトラ古墳の玄武図とは全く逆の絡み方になる。すなわち江西大墓の玄武図を粉本としては、高松塚古墳やキトラ古墳の玄武図は描けないということにもなると考える。

次に奈良薬師寺本尊台座の玄武をみてみよう。①の交差点では頸が上を通り、②では下を通り絡む。③は上を通り、尻尾の方は下を通る。すなわち高松塚古墳やキトラ古墳と比較すると①、②での交叉状況は逆で江西大墓と同様であるが、③の状況は高松塚古墳やキトラ古墳と同じであり、江西大墓とは上下逆になる。

正倉院十二支八卦背円鏡を観察すると①、②、③とも高松塚古墳やキトラ古墳と同じ形状である。同時に江西大墓と逆であり、薬師寺本尊台座とは③の部分異なる。

一体これらの相違は何を意味しているのだろうか。その理由の適格な見解はいまのところない。ただ、玄武図といっても細部において画法や表現が異なる。こういう点を無視して玄武図があれば、高句麗、あるいは粉本は高句麗壁画であると主張してよいだろうか。より慎重な対応が肝要であり、近々に改めてこの類の資料

を集積して私見を述べることにする。

#### (4)

キトラ古墳玄武図に関連してもう一つの問題を検討しておきたい。キトラ古墳の探査によって南壁に、西向きの朱雀図が描かれていた。前回の2次にわたるファイバースコープによる探査の結果、東壁の青龍の一部、西壁の白虎、北壁の玄武図は分かった。ところが、西壁の原則に反して白虎が北向きに描かれていた。これをめぐっての意見が述べられた。そのうちの一つに見解に、四神図が時計廻りに描かれているというのがあった。ところが、玄武図は明らかに西を向いていることからこの意見は一瞬に否定された。

今回、朱雀が西向きに描かれていることをうけて再び百橋明穂氏のようにTVや新聞などのメディアを通じて時計廻りとし、これを循環構図とする所見を述べられた。これには大きな矛盾がある。それは玄武図である。四神図は本来、四方の7宿を具象化した図像であって、亀は西側に頭があり、西向きに描かれるものである。キトラ古墳の玄武を東向きとするのは極めて滑稽な見解である。それは、亀は東を向いているのではなく、蛇と向い睨み合っているのである。そこには東を向くという意識はない。例えば、集安四神塚などの資料に見られるように蛇の顔が玄武の顔と対峙しており東を向く亀という意識は感じられない。

もう一つ重要なことはこれを認めるとすると江西大墓にしろ、高松塚古墳、キトラ古墳をはじめ薬師寺本尊台座像や正倉院御物十二支八卦背円鏡など玄武図の大半はすべて東を向いているということとなる。そうすれば四神図の意味がなくなる。

#### (5)

学問的理解は同様な資料がある場合、できるだけ多くの資料を聚成し、その共通点、相違点を比較して事の真実を究めようとする方法をとる。単なる思いつきで、他の資料を全く無視して自説を主張することはよくない。所見を述べるのはよいが、単なる思いつきでなく、慎重な考察から結論を導き出す手法でなくてはならないと思う。